

にっこりい

～いつもやさしく～



発行日：令和3年4月10日 第64号

白馬メディア・神城醫院

おかげさま
ありがとう **20**th Anniversary



4月で開設 20 年を迎えました



平成 13 年頃



編集・発行

城西医療財団 白馬広報委員会

社会医療法人 城西医療財団 <http://www.shironishi.or.jp>

かみしろ
神城醫院（内科・心療内科・皮膚科・精神科）
'S' ウェルネスクラブ神城（厚生労働省認定健康増進施設）

しろうま
白馬メディア（介護老人保健施設）
かたくりの郷（認知症対応型共同生活介護）
北アルプス訪問看護ステーション
北アルプス訪問介護ステーション
しろうま（居宅介護支援事業所）

〒399-9211
長野県北安曇郡白馬村大字神城 22844
TEL 0261-75-7100（代）
FAX 0261-75-7120





20年目の春

神城醫院 院長・白馬メディア 施設長
宮城 彰



長く重苦しいコロナ禍のなかでも季節は廻り私たちの施設は20年目の春を迎えています。

100年ぶりというパンデミックの不安は世界中を覆い尽くし、人々の暮らしは感染防止一色に塗りこめられました。人間世界の中で未知のウィルス COVID 19 に対し、当初は有効な医療的防止策はなく世界中が大混乱に陥りました。日本も例外ではなく、感染拡大防止のための緊急事態宣言が繰り返されながらも人々の暮らしの懐深く侵入したウィルスの封じ込めは困難を極め、現在も緊急事態宣言解除直後にも関わらず感染再拡大第4波の最中にあります。

白馬村でも令和2年12月から年明けて今年の2月まで約2ヵ月間で100人余の感染者が発生し、1月20日には長野県が発令する感染警戒レベルが最高基準のレベル5に引き上げられ、一時は『日本で一番危険な村』と揶揄されました。経済活動の中核を観光に依拠しようとしてきた村にとって産業面での被害は甚大で、今後の村の存続に関わる課題になっています。

「三密」を避け、ソーシャルディスタンスを守ることが日常生活の基本とされ、マスクなしの外出は「非国民」呼ばわりされ、都会のみならず全国津々浦々まで人々の顔がマスクに覆われるという不気味な現象が日常化しています。「不要不急」の外出は自粛する、という『同調圧力』が人々の暮らしの在り方を大きく変えました。高齢者施設は感染拡大・重症化のリスクが大きく、緊急事態宣言とともに一斉に面会禁止になりました。進行する高齢者社会の中で、しわよせ被害に苦しむ高齢者の問題を、家庭や地域の人々のつながり方の中で解決していくことを目指してきた私たちの取り組みにとって、人と人の接触を断つことでしか果たせない感染予防の問題は大きな壁になってきました。人々はこの甚大な災厄から暮らしを守るために様々な方策を考えてきました。働き方改革の一環でリモートワークの可能性が拡がり、一斉休校時のオンライン授業が小学校から大学まで実施され、あらゆる会議がウェブ会議化され、人と人が対面し関わることでなされてきた人間の営みが、一挙に電磁化されあるいはバーチャル化された感があります。「災害は喪失と再適応のストーリー」と言われますが、再適応で目指されている人の暮らしの在り方、生き方とはなんでしょうか。高齢者施設の現場において高齢者の側から社会的課題を見ていると、ますます社会の流れから置き去りにされていく人たちの深い悲哀を痛感します。面会禁止で持ち出されたオンライン面接では人のつながりを実感できない高齢者のほうが多いのです。

コロナ禍解消の切り札とされるコロナウィルスワクチン接種が遅まきながらわが国でも始まりました。しかし感染対策の対象は世界人口78億人と膨大で、全人口の約7割近くの抗体獲得がパンデミックの収束条件とされていることを考えると、収束への道筋は途方もないことに思えます。さらに感染期間が長引くにつれ幾種類かの変異株ウィルスの出現と拡大という、まことに厄介な課題が上乘せられてきています。現時点での専門家の推測ではコロナ禍の収束には2年から場合によっては数年を要するとされています。コロナ禍は人間世界に大きな課題を投げかけています。経済至上主義から変容してきた人の繋がり方、暮らし方、働き方への課題は、地球温暖化に伴う異常気象など地球規模の自然環境破壊とともに世界的な大きな課題です。今コロナ後の世界の在り方について様々な議論が巻き起こっていますが、コロナ後を待てない高齢者も多いのです。結局抑圧されたコロナ禍を生き、コロナ禍の中で死んでいくしかない高齢者にとって、コロナ禍のなかでいかに人生を全うしていけばいいのか、重い課題です。これは高齢者だけの課題ではなく、高齢者とともに生きる私たちみんなの課題ではないでしょうか。

施設開設10年目がちょうど東日本大震災の最中でした。私たちの国は大震災の提示した喪失から再適応への課題を抱えたまま、さらに重い課題に直面しています。

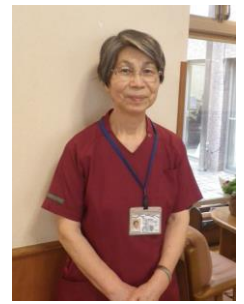
「いつも優しく」をモットーに、他者と優しく向き合うため「お互いの成長と自己実現を願いながら支えあう関係づくりをめざす」という理念を掲げながらも、私たちの20年の歩みは拙い試行錯誤の歴史です。その存続は一重に利用者の方々の忍耐と寛容に励まされ支えられたおかげであり、高齢者ケアを巡る様々な困難の中にありながら、私たちの試行錯誤を受け入れ励ましてくださったご家族のみなさん、共感・協働の輪の中に私たちを呼び込んでくださった地域の方々のおかげです。そしてケアとは、ケアする側からされる側に一方的になされる行為ではなく、お互いの支え合いの中で成り立つものなのだとは私たちは教えていただきました。この20年間、私たちとともにあったたくさんの親しい顔を思い浮かべながら、お一人おひとりに心から感謝いたします。

厳しい社会情勢を背景に施設運営にも課題が山積していますが、職員一同、開かれた対話に未来を託しながら一つ一つの課題に取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



開設 20 年を迎えて

神城醫院・白馬メディア 看護長
西澤 尊子



令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を一変させた。施設では1年以上にわたる面会制限が続き、ご利用者とご家族には寂しい思いをさせている事に大変申し訳ない気持ちである。

例年4月には開設記念祭があり、夏には天神原夜祭で、地域の太鼓の音が響き花火を上げて亡くなった方達の霊を慰め、秋には敬老おたっしや会で長寿を祝い、年末の忘年会では1年の無事を感謝するのが恒例の行事であった。今まではご家族や地域の人達と一緒にその大切な時を過ごしたものだが、この一年は残念ながらそれらを叶えることが出来なかった。そればかりか一時大北圏域にも感染者が増えて職員のPCR検査やコロナウイルスワクチンの接種が早々に行われた。しかし、未だ終息の兆しが見えぬままである。

このような状況の中でも人生100年時代と言われる時代となり、100歳以上の人は10年前は4万人だったのが、去年は8万人を超えた。10万人になるのはそう遠くはないような気がする。それは私たちの施設にも元氣な百寿歳の方がいるからである。

お肌すべすべの絹子姐さんは、百寿の日の留袖姿はとても素敵だった。納涼祭には職員を着ていた着物をみて「綿組」がお似合いとさらっと一言、一目見ただけで綿組を言い当てたのは着物の仕立てをしていただけあってさすが。記憶力抜群の華姐さんは「百五歳のお誕生日おめでとう、いかが？」と尋ねると「ゴジャネエロクダ・・・」と。「??」そうか数えの六でしたね、失礼いたしました。都会育ちの富姐さんはオセロの腕前は見事なもので、「白馬に来て私を負かした人は今まで一人もいないよ」と。

年々百寿者が増えている感はある、しかも皆さんお元氣である。足腰が痛くなると「もう歳だから・・・」と何事もあきらめがちだが世界的にも高齢者の体力は向上しているとのこと。

コロナ禍に見舞われたこの大変な時期を皆で足元をしっかりと固めて百寿者を見習って乗り切りたいものである。



白馬メディア 20 周年を迎え

神城醫院・白馬メディア 事務長
手塚 尚徳



令和3年4月の訪れと共に、白馬メディアはこの地域で初の介護老人保健施設として産声を上げ、行政と地域の方と助け合い、白馬小谷地域で医療と介護を支え続け、開設二十周年を迎えます。

開設当時、この地域では医療介護サービスの選択肢が少なく、住民の高齢化に伴い、高齢者の方が、この地域でどの様に過ごして行くのかが、重要な課題でした。課題解決のため白馬メディアは、開設当初より行政や地域の方と連携し、この地域で過ごされ方のため、私たちが何が必要か、何が出来るのかを問い続け、最善の「介護予防」「通所」「入所」「医療サービス」を提供し続け、地域の多くの方に利用していただき、二十年が経過しました。

勿論、私たちだけではなく共に、二十年間歩み続けた、行政の方や地域の方と成果です。この取り組みは、近年国が提唱する、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、「住まい」「医療」「介護」「予防」「生活支援」が切れ目なく一体的に提供される体制をいち早く実践していると誇れる成果です。

これからも、この地域で介護医療を支える施設として、皆さんと共に三十年、四十年と歩み続けます。

シリーズ
にんち
症

第38回



母の笑顔

白馬メディア 介護部
すみれ棟 松澤 ゆかり



今から 10 年前、上の息子が小学校に上がった頃に、義母が認知症を発症しました。その頃に白馬へ一家で引越したこともあり、慣れない土地での生活だったので家族のことを気にかけることが出来ませんでした。そのため母の異変に気付くのが遅くなってしまいました。病院へ受診するとアルツハイマー型認知症とのことでした。生活環境が変わったことが引き金となり、病気がどんどん進行していきました。

最初は同じものを買ってきたり、同じ会話の繰り返しをしたり、そんなささいなことでした。やがて自分でやってきた事が出来なくなったり、“自分がどんどん分からなくなってしまう”“寝て起きたら何もかもがわからなくなってしまう”“名前も分からなくなってしまう”母はそんな不安を募らせ私に相談してくるようになりました。

その事を主治医の先生に相談すると環境を変えるために家の外に出る事を勧められました。始めは一緒にドライブや食事に行ったりしましたが、母に変化がみられませんでした。再度、主治医の先生に話をするとデイサービスに行く事を勧められました。私には不安もありましたが、母はデイサービスに行く事にしました。行ってみると、友達ができ楽しく過ごす事ができるようになり、笑顔を見せる様になりうれしく思いました。

けれど病気は、月日を重ねるごとに悪化していきました。デイサービスの日でも無いのに家から出て雪の中を歩き回っていることもあり探しに行く事もありました。ケアマネージャーさんに相談しショートステイを利用させていただき、冬場は施設への長期入所をすすめられました。私は家で母と一緒に暮らしたかったのですが、施設を利用したほうが、家族みんなが母に優しくなれるのではないかとケアマネージャーさんに提案され、家族で話しをし、冬場長期入所をしました。

その後、大きな病気で手術することになり、病院での生活が3ヶ月ほど続きました。お見舞に夫、中学生と小学生の息子と行くと、夫のことは 30 年前に亡くなった父と間違え、下の息子の事は覚えていませんでした。退院後、家での介護が難しいとのことで、特別養護老人ホームで暮らしています。

今は新型コロナウイルス感染症流行のため母に会う事が出来ず不安もあります。面会ができていた時は、家族のことを心配したりする、以前の穏やかな母に戻り施設の方には感謝しています。

新型コロナウイルス感染症が落ち着いたら母の笑顔を見に行きたいと思っています。

～編集後記～

平成 13 年 4 月に開設し、今年 20 周年を迎えることができました。広報誌を作り始めたのは平成 17 年 7 月で当時は『白馬メディア通信』という名前でした。『にっこりい』という名前に変わったのは平成 19 年 1 月です。

今回 20 周年記念号を作成するのにあたり創刊号を読み返してみると 16 年前の私が書いた文章が載っていて、懐かしく読み返しました。その時関わったご利用者の顔が思い浮かび涙が出そうでした。自分の顔写真も若々しくお肌もツヤツヤでした。3 児の母となった現在は・・・。

開設してからの 20 年たくさんの方々との出会いと別れがありました。ご利用者から元気をもらい、いろいろなことを教えていただき、これまで介護の仕事が続けてくることができました。

コロナ感染症対策のため、長い期間面会制限をされており、ご利用者・ご家族の方々には随分と淋しい想いをされていることと思います。『にっこりい』で少しでも施設内の様子を発信してお知らせできたら良いなと考えています。

『にっこりい』を読んで下さっている全ての方々に感謝し、これからもより良い広報誌作りをしていきたいです。

白馬広報委員長 長澤 佐知子